



日本生態学会

ニュースレター

No.11

2006年12月

[目次]

男女共同参画学協会連絡会第4回シンポジウム参加報告.....	1
--------------------------------	---

記 事

I. 全国委員会での承認事項	3
II. 書評依頼図書	3
III. 寄贈図書	3
IV. 後援・協賛	3
V. 地区会報告	3

お知らせ

1. 公募	9
2. 第18回国際生気象学会議（ICB2008）開催案内	10
3. 第27回（2007年）関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ	10

書 評	10
-----------	----

会 則	12
-----------	----

京都大学生態学研究センターニュース	14
-------------------------	----

男女共同参画学協会連絡会第4回シンポジウム参加報告

将来計画専門委員会

男女共同参画学協会連絡会（以下連絡会と略記、<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>）の第4回シンポジウムが、設立4年目を迎えた2006年10月6日（金）に東京大学山上会館で開催された。日本生態学会からは、菊沢会長ほか常任委員の山本、長谷川、将来計画専門委員長の可知、同委員会常任オブザーバーの松本（学術会議担当）、西谷会員の6名が参加した。今回のシンポジウムのテーマは「育て、女性研究者!! 理工系女性研究者支援の新しい波」であった。このテーマの背景には、2006年度中に、女性研究者支援モデル事業（進行調整費）、復帰支援特別研究員制度（学術振興会）など女性研究者支援のためのさまざまな施策が開始されたのをうけ、これらの施策・制度がどのように定着し、女性研究者が育成されることを監視し、それらの改善を提言していくことが重要であるという連絡会の現状分析がある。

連絡会は2002年10月に自然科学系の学協会が連携して発足し、現在では31の学協会が正式加盟、20学協会がオブザーバーとして参加している。これらの学協会に所属する会員の総数は約40万人、そのうち女性会員は約2万人（5%）である。日本生態学会は2003年11月20日に正式に連絡会に加盟した。日本森林学会、日本植物学会、日本動物学会も正式加盟学会である。以下、午前中の3つの分科会と午後の全体会について報告する。なお、全体会として開催されたパネル討論については、菊沢会長による囲み記事を参照されたい。

分科会 A 「女性研究者支援、有効な支援を目指して」

分科会の目的について、オーガナイザーから以下のような説明があった。各大学や公的研究機関では、女性研究者が研究と出産・育児を両立するための様々な支援が行われつつあるが、実際には、総論賛成・各論反対となりがちであり、たとえば逆差別ではないかといった声が聞かれるなど、支援策が有効に機能しているとはいえない。そこで、振興調整費の女性研究者支援モデル育成事業に採択された大学の取り組みや女性研究者を多く抱える研究所の状況を聞き、有効な支援策について検討する。

6大学の取り組みと国立遺伝学研究所の現状の報告のなかで、各機関に特徴的で有効に機能していると感じられた支援策や制度は以下の通りである。

- ・保育所など施設・制度の整備とともに精神的サポートに力点をおく。
- ・男女ともに勤務スタイルを変える（9時～17時勤務、会議等の負担軽減、事務の専門性向上など）。
- ・総合大学としてできることは全部やる。
- ・小規模大学の特徴を生かした、地域密着型の生涯にわたる女性研究者共助システム
- ・多様なモデルの提示。継続・部分継続・途中から研究者へ・他の職種（ジャーナリストや行政官等）へ。
- ・若手が仕事をしやすい制度（助教授PI（Principal

Investigator）の増加等）が女性研究者の増加につながる

質疑応答では、「保育所の整備などコンセンサスを得やすい支援もあるが、研究支援などは分野によって事情が異なるため一律の制度にするのは難しい」「採用の際、出産・育児で中断した年数を加味した業績審査を行う機関も出てきているが、採用までの業績ではなく採用後期待できる能力を評価できればさらに望ましいのではないか」という意見が出された。（参加者：山本智子）

分科会 B 「新たな活躍の場をもとめて：フロンティアをめざす研究者」

この分科会の趣旨は、「若い科学者の、新たな活躍の場を開拓しよう」というものであった。“新たな”とは、大学教員などのいわゆるアカデミックポジションだけが、研究者の活躍の場ではないという意味である。「ポスト・ポストドク問題」が深刻さを増す現状を踏まえて企画されたこの分科会では、医学・生物学系の学位を持ち研究の経験も積んでいるが、現在は直接研究に携わっていない3名の方々（それぞれ、バイオ系のベンチャーキャピタル、NPO法人、日本科学未来館に勤務）から話題提供がなされた。研究の現場を離れることは、とするとドロップアウトのようにとらえられがちであるが、そうではなく、科学の知識と研究の経験を十分に生かせる場が、社会に広く存在することを認識させてくれる講演であった。研究者がすすむべき多様なキャリアパスを開拓し、さまざまなロールモデルが若手研究者に認知されることが今後ますます重要になるであろう。（参加者：西谷里美、可知直毅）

分科会 C 「実験教室から発信する!!」

この分科会は、「女子高校生が先入観を持たずに、興味ある分野に進学して、将来の職業を選択するために、科学者たちはなにができるか」という問題意識の元に、特に中学・高校の教育現場での教師の取り組みを報告したものである。報告として、文部科学省のプロジェクトに関係したもの2件と、日本原子力学会での取り組みの合計3件の話題提供があった。

- 1) 実験の楽しさを伝える「青少年のための科学の祭典」での15年間の活動状況、
- 2) 埼玉県のスーパーサイエンス高校（SSH）に指定された高崎女子高校と、男子校である高崎高校の生徒たちの、科学技術に対する興味・関心の比較
- 3) 日本原子力学会「女子高校生の夏の学校」での活動状況

以上に関する質疑応答では、以下のようなものが出た。

- ・報告されたものはどれも理科に関心を持っている生徒に関するものであるが、そもそも理科に顔を向けていない生徒に対して興味を持たせるにはどうしたら良いか。
- ・特に女子の場合は、中学生の段階での理科離れが大き

いのでそれをなんとかしなければならない。

・女子生徒が理科離れになるのは、生徒の母親の認識が問題である。

・小学校で理科教師がいないところが3割にもなっているのが問題である。

・体験学習をさせることで、自らが必要感をもって理科に取り組めるようにしなければならない。

・高校生には実験・実習はしっかりとしたストーリー性をもって持ちかける必要がある。さもないと、飽きられてしまう（参加者：松本忠夫）。

ポスターセッション

ポスターセッションは山上会館2階のロビーを会場として、17の学協会の活動紹介と振興調整費による「女

性研究者育成支援事業」を実施している10大学の取り組み紹介および連絡会が主催した2006年度「女子高校生夏の学校」について発表があった。なお、生態学会は、ポスター賞専攻委員長を分担した。（可知直毅）

全体会議

午後の全体会議では、まずこのシンポジウムの幹事学会である日本分子生物学会の会長花岡文雄氏の挨拶、来賓として参加した林幸秀文部科学省文部科学審議官の挨拶、浜田順一東京大学副学長の挨拶につづき、総合科学技術会議議員の阿部博之氏の講演があった。男女共同参画は科学技術分野の人材育成策の要であることを、アンケート調査など客観的なデータにもとづいて主張することの重要性が強調された。（可知直毅）

様々なボトルネック：パネル討論に参加して

日本生態学会会長 菊沢喜八郎

パネル討論では、連絡会運営委員長の大隅典子東北大学教授の司会で、6名のパネリストによる話題提供があった。育児も含めて、日本文化の創成に女性や高齢者を含む多様な人たちが参加していくという大きな目標のなかで、自然科学の研究に女性の参画をどのように増やしていけるかが、第4回を迎えるこのシンポジウムの課題である。欧米では30%に達する女性研究者の比率が日本では10%であり、その差は歴然としている。文部科学省では採用枠を25%にするという数値目標を立て、実現のための施策を色々講じている。

自然科学に女性が少ないということについてはいろいろなところにボトルネックがある。まず最初は大学入学以前、つまり小中高校にある。それも学校の先生（の進路指導）に原因があるという。そういうことが何故解るかという学協会連絡会が熱心に取り組んだ調査によって明らかになったことらしい。やはりこういうこともデータの積み上げが実に大事なんだ。

女子高校生（中学生）を対象にした取り組みとしては、彼らを対象にした「夏の学校」などが考えられる。これは日本生態学会としても当然取り組まなければならない課題であると考えた。生物オリンピックなどもその一環になるかも知れない。さらに、彼らに女性研究者の「モデル」を提示することも必要であるとの指摘もあった。「高校生に対しては、学部生や院生、学部生に対しては、院生やポスドク、助手などが格好のモデルになってくれないか」と思う。日本生態学会としてはホームページ上で、女性会員の研究生活や日常などを紹介していくことも可能かもしれない。

次のボトルネックはポスドクのあたりにある（個人によっては大学院入学の時期）。今はポスドクまではなんとかやれるシステムになっているが、育児休暇などが無いなどの問題がある。多分、こういった障害は比較的早急に解決されるだろうというのが私の印象である。

それで、最大のボトルネックは常勤職への採用のところにある。数値目標だけ示しても、現場がやってくれなければ進まない。そこで、平成18年度には文部科学省は「女性研究者支援育成」というプログラムのための資金を全国の10大学に出して、それらの促進や様々な支援を図っているというわけだ。数値目標を出すだけでなく、ポジティブアクションをとるべきか、というのが大きな問題である。「オトコだって就職難で大変なのに、女性専用という職を設けるというのはどんなものか」というのがおおかたのご意見のようである。だからといって、各講座の個人経営の集合体みたいな大学に今のままで任せておいては、なにも変わらないのではないかと。それで、各モデル事業の出番になるのだが、業績審査の際同等の業績であれば女性優先にするとか（名古屋大学）、女性を雇えば、その人件費のいくらかを大学本部が負担する（北大）とかの事例が紹介された。雇用の際の年齢制限なども、出産育児を経験した女性にとっては不利になるのではないかという意見も出ていた。

次のボトルネックは出産育児からどのように復帰するかにあるようで、女性比は助手に比べれば、教授がずっと低くなる。そのあたりは企業ではけっこう割り切っておられて、誰かが休めば代わりの人がその仕事をし、また復帰すればその仕事に戻るということが簡単なようだ。大学の個人経営的なところが問題なのだろうか。業績審査のさいに、出産育児の年数を差し引くなどとの処置をとれば改善されるかもしれない。在宅勤務とか勤務時間の自由裁量制なども考慮すべきだ、という意見もあった。

記 事

I. 全国委員会での承認事項

1. 第5回日本生態学会賞および第11回日本生態学会宮地賞選考委員として以下の委員が承認された。
昨年からの継続委員：東正剛（委員長）・粕谷英一・工藤岳
新規委員：柴田銃江・竹中明夫・松田裕之

II. 書評依頼図書（2006年5月～2006年11月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 竹中修企画・村山美穂・渡邊邦夫・竹中晃子編「遺伝子の窓から見た動物たち」（2006）452pp. 京都大学出版会 ISBN:4-87698-682-7
2. エコソフィア編集委員会「エコソフィア 17」（2006）128pp. 昭和堂 ISBN:4-8122-0616-2
3. 武田博清・占部城太郎編「陸域生態系の科学 地球環境と生態系」（2006）284pp. 共立出版（株） ISBN:4-320-05637-X
4. 鷺谷いづみ著「サクラソウの目 第2版 ―繁殖と保全の生態学―」（2006）248pp. （株）地人書館 ISBN:4-8052-0775-2
5. 高槻成紀著「シカの生態誌」（2006）484pp. 東京大学出版会 ISBN:4-13-060187-3
6. 大森信・ボイス ソーンミラー著「海の生物多様性」（2006）412pp. 築地書館 ISBN:4-563-07801-8
7. 菊地直樹著「蘇るコウノトリ」（2006）266pp. 東京大学出版会 ISBN:4-13-063326-0
8. 遠藤秀紀著「遺体科学の挑戦」（2006）210pp. 東京大学出版会 ISBN:4-13-063328-7
9. 田中章著「HEP 入門＜ハビタット評価手続き＞マニュアル」（2006）270pp. 朝倉書店 ISBN:4-254-18026-8

III. 寄贈図書

1. 「東レ科学振興会第46回事業報告書」（2006）136pp. 東レ科学振興会
2. 「SESSILE ORGANISMS 23 巻第2号」（2006）74pp. 日本付着生物学会
3. 「作物研究所年報 平成17年度」（2006）106pp. 作物研究所
4. 「鹿島学術振興財団 第30回2005年度年報」（2006）290pp. 財団法人鹿島学術振興財団
5. Hiroaki Hatta・Dedy Darnaedi 編「Phenology and Growth Habits of Tropical Trees」（2005）436pp. National Science Museum
6. 八田洋章・Mujahidin 著「樹木散歩 ボゴール植物園」（2006）77pp. 国立科学博物館
7. 八田洋章・Anggun R. Gumilang 著「樹木散歩 チボダス植物園」（2006）63pp. 国立科学博物館

8. 「うみうし通信 No.52」（2006）12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所

IV. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 2006年度日本付着学会シンポジウム「海洋生物の着底と変態」
期間：平成18年10月25日 - 10月26日
場所：東京大学農学部弥生講堂一条ホール
主催：日本付着生物学会
2. シンポジウム「経済・社会の発展と生態系への影響」
日時：2006年10月23日（月）
場所：東京国際フォーラム ホールD5
主催：独立行政法人国立環境研究所、国立大学法人横浜国立大学
3. 2006年花の万博記念「コスモス国際賞」受賞記念講演会
平成18年10月24日（火） 大阪 オーバルホール
平成18年10月29日（日） 東京 ベルサール神田
主催：財団法人国際花と緑の博覧会記念協会

V. 地区会活動報告

北海道地区会（2005年9月1日 - 2006年8月31日）

- (1) 2005年度役員会を開催した。

開催日：2006年2月19日（日）

場 所：帯広市・とかちプラザ

出席者：前川光司・齊藤隆・紺野康夫・高田壮則・明石信廣・揚妻直樹・村上正志

議題

1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定（地区大会）
4. 選挙
5. その他

以上の件について審議の上、了承された。

- (2) 2005年度地区大会・総会を開催した。

開催日：2006年2月19日（日）

場 所：帯広市・とかちプラザ

若手研究発表会

「農耕地におけるマルハナバチによる花資源の利用」
岡田梨江・紺野康夫（帯畜大・環境）・永光輝義（森林総研・北海道）

「セイヨウオオマルハナバチがエゾエンゴサクの授粉成功に与える影響」堀田はるか（北大・苫小牧研究林）

「攪乱履歴と現在環境が及ぼす林床植生への影響」
日野貴文（北大院・農）・日浦勉（北大・苫小牧研究林）

「最北限のブナ林における優占樹種ブナとミズナラの更新動態」小林誠（北大院・環境科学院）

「ネズミ個体数の増減に与える堅果の豊凶の影響」
大澤淳・大森正明・鷹西俊和・早柏慎太郎・植村滋・齊藤隆・前川光司（北大院・農）

「北海道における河川底生動物群集—地理的パターンと決定要因—」森照貴（北大・苫小牧研究林）
 「北海道北部小河川におけるサケ科希少種イトウの初期分散に関する研究」野本和宏（北大院 地球環境）
 「知床半島ウトロ地区農地における防鹿柵を利用したヒグマ侵入防止電気柵の効果」中西将尚・小平真佐夫・葛西真輔・長多邦裕（（財）知床財団）
 「ニホンジカの群れサイズの季節変化に影響する要因：標識個体の直接観察に基づいた分析」伊藤英人・齊藤隆（北大院・農）
 「自然環境要因からみたエゾタヌキのロードキルの傾向」荒木奈津子・野呂美紗子・Buhe Aosier・赤坂宗光・吉村暢彦・金子正美（酪農大・環境システム学）
 「野外における寄生蜂の寄主識別行動の推定」水谷杏子・楠田尚史・仲島義貴（帯畜大・環境）
 「寄生蜂はどのようにアリの随伴するアブラムシコロニーで寄生を成功させるのか？」石井康規・仲島義貴（帯畜大・環境）

一般講演

「水生菌類が小型藻類と大型藻類の共存に果たす役割：数理モデルによる解析」瀧本岳（北大苫小牧研究林、Yale University）・鏡味麻衣子（Netherlands Institute of Ecology、北大地球環境）・三木健（京大生態研）
 「生態学における創発と階層性」小野山敬一（無所属）
 「知床半島におけるヒグマの推定個体数とその傾向」小平真佐夫・岡田秀明・山中正実（（財）知床財団）
 「捕食者飽食戦略を用いたブナの結実予測」八坂通泰（北海道立林業試験場）
 奨励賞に、水谷杏子（帯畜大・環境）、森照貴（北大・苫小牧研究林）の2名を選び、賞状と寸志を送った。

総会

議題

1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定
4. 選挙について

東北地区会

(1) 東北地区会第50回大会

日 時：2005年11月26日～27日
 会 場：秋田カレッジプラザ（明徳館高校ビル2階）
 シンポジウム（11月26日）
 「冷涼地における新たなマツ枯れ対策の確立に向けて」
 1. 趣旨説明にかえて
 「今、何を明らかにし、どんな行動をとらなければならないか」
 蒔田明史（秋田県立大・森林科学）
 2. 事例報告
 1) 研究現場から
 「夕日の松原におけるマツノマダラカミキリの産卵時期」
 小原祐太・小林一三（秋田県立大・森林科学）
 「秋田県の砂防林におけるマツ枯れの現状と再生に

ついて」

金子智紀（秋田県森林技術センター）

2) 住民サイドから

「『松枯れ再生運動』(社)秋田経済同友会の取り組み」

佐藤健三（秋田経済同友会）

3) 行政の取り組み

「松くい虫対策について～行政の対策現場から～」

小川正（秋田県秋田地域振興局農林部森づくり推進課）

3. 講演

「東北地方のマツ枯れ対策に向けての研究面での課題」

中村克典（森林総研東北支所）

4. 総合討論

「『秋田方式』の防除システム確立に向けて」

コメンテーター：小林一三（秋田県立大・森林科学）

一般講演（11月27日）

1. 「アオモリトドマツ樹冠上部の当年枝伸長量と樹冠各部位のサイズとの関係について」関剛（森林総研・東北支所）
2. 「フルレンジ・スケーリングにおける根を含む樹木個体呼吸の一般化」森茂太（森林総研・東北支所）
3. 「海岸マツ林に侵入しているニセアカシアの個体群構造と萌芽の発生」田村浩喜*（秋田県森林技術センター）・蒔田明史（秋田県立大）
4. 「東北地方におけるハイマツの年次伸長量 - 山岳間変異」酒井大輔*（秋田大学）・佐藤賢輝（秋田大学）
5. 「鳥海山におけるハイマツの年次伸長量 - 山岳内変異」今村直明（秋田大学）・成田憲二*（秋田大学）
6. 「トチノキ実生の生残過程と斜面位置、同種樹冠縁からの距離との関係」—発芽後12年間の追跡結果から—杉田久志*（森林総研・東北支所）・伊佐治久道（岐阜県庁）

(2) 2005年度地区委員会

日 時：2005年11月26日12:30～13:30

会 場：秋田カレッジプラザ（明徳館高校ビル2階）

出席者：蒔田明史、松政正俊、占部城太郎、菊地永祐、鈴木孝男（庶務幹事）、玉手英利、木村勝彦、牧野渡（会計幹事）、成田憲二（大会事務局、オブザーバー）

報告事項

1. 庶務報告

- 1) 2005年2月10日：日本生態学会東北地区会会報第65号を発行した。
- 2) 2005年4月11日：東北地区委員の広瀬忠樹が2005年3月末日をもって他地区に転出されたのに伴い、次点の牧雅之氏（東北大学）が残期間の地区委員に就任した（任期：2005年4月1日～2006年7月31日）。
- 3) 2005年4月11日：「東北地区会運営の手引き（2005年度版）」と「東北地区会選挙細則（案）」を作成し、地区委員に送付した。
- 4) 2005年5月12日：ホシザキグリーン財団から「ホ

シザキグリーン財団研究報告」第8号と「ホシザキグリーン財団収蔵資料目録」(1)が寄贈された。

- 5) 2005年10月14日：第50回地区大会及び総会の案内を発送した(秋田県)。
 - 6) 2005年11月18日：第50回地区大会のプログラムを発送した(秋田県)。
 - 7) 2005年11月26日：秋田カレッジプラザにおいて、地区委員会を開催した。
 - 8) 2005年11月26、27日の両日にわたって、秋田カレッジプラザにおいて第50回地区大会及び総会を開催した。
 2. 会計報告
2004年度決算報告と2005年度中間報告ならびに今後の執行見込について報告があり、了承された。
 3. 地区会員数
2005年11月15日現在、学生会員37名、一般会員181名、合計218名である。2005年1月以降の減少数(転出・退会)は30名、増加数(転入・入会)は16名であった。
 4. 東北地区会大会開催要項
2003年度地区委員会での地区大会開催に関する申し合せ事項をふまえて、大会の運営に関する要項を事務局で整理したことが紹介された。
 5. その他
日本生態学会の役員改選の結果を受け、東北地区の選出委員について、占部地区委員長から紹介があった。また、全国大会は大会企画委員会がサポートする体制が整えられたことについても説明があった。
- 審議事項
6. 2006年度予算
2006年度の予算案について説明があり、承認された。
 7. 東北地区会運営の手引き(2005年度版)
上記について説明があり、承認された。
 8. 会計監事の選出
「東北地区会運営の手引き」6. 会計監査の項に従い、会計監事として菊地永祐氏が推薦され、承認された。任期は2006年7月31日までとなる。
 9. 東北地区会選挙細則
上記について説明があり、承認された。
 10. 選挙管理委員の選出
「東北地区会選挙細則」3項に従い、選挙管理委員として彦坂幸毅氏と太田宏氏が推薦され、承認された。任期は2006年7月31日までとなる。
 11. 次回地区大会開催地
山形県地区委員の玉手氏から、次回地区大会を山形県で引受ける旨の発言があり、これを承認した。
 12. 次次回地区大会開催地
次々回の地区大会開催地について、これまでの地区大会開催地の順番表をもとに審議した結果、福島県にお願いすることになった。
 13. その他
今大会において、一般講演申込みが少なかったこ

とを受け、もっと一般講演を増やすための方策について種々意見を交換した。

(3) 2005年度地区会総会

日 時：2005年11月27日 11:10～12:00

会 場：秋田カレッジプラザ(明徳館高校ビル2階)

報告事項

1. 地区委員会における庶務報告、会計報告が了承された。
2. 東北地区会の会計監事に菊地永祐氏、選挙管理委員に彦坂幸毅氏と太田宏氏が選出されたことの報告があり、これを了承した。

審議事項

3. 2006年度予算案が原案の通り、承認された。
4. 次回地区大会は山形県で開催することが承認された。
5. 次次回地区大会を福島県にお願いすることが承認された。

関東地区会

2005年(1月～12月)活動報告

1. 地区委員会を2005年4月27日(水)横浜国立大学環境情報研究院にて開催した。
議題：2004年度の地区会報の出版進行報告、2005年度の地区会シンポジウムのテーマ
2. 地区総会を2005年10月1日(土)神奈川県生命の星・地球博物館にて開催した。
報告：会員動向、2005年活動報告、会計報告
議事：2004年度決算および2006年予算、2006年活動予定を承認
次期役員と事務局を決定
3. シンポジウム「シカと山と人の新しい関係―狩猟管理から生態系管理へ―」を共催した。
2005年10月1日(土)神奈川県生命の星・地球博物館
主催：横浜国立大学21世紀COE「生物・生態環境リスクマネジメント」(講師交通費など)；
共催：日本生態学会関東地区会(テープ起こしによるシンポジウム記録を会報として出版、ポスターデザイン)、神奈川県生命の星・地球博物館(会場)、(財)国際生態学センター(準備)、かつこ内は各団体の分担内容。
「開会挨拶」青木淳一(神奈川県生命の星・地球博物館)
「趣旨説明」伊藤雅道(横浜国立大学)
「ヤクシカ増加下での屋久島の稀少植物のモニタリングと保全計画」矢原徹一(九州大学)
「丹沢山地におけるシカ食害による偏向遷移について」村上雄秀(国際生態学センター)
「丹沢山地でのシカによる植生への影響と植生回復対策」田村淳(神奈川県自然環境保全センター)
「知床のエゾシカ保護管理計画の論点：遷移に委ねるか管理するか」梶光一(北海道環境科学研究センター)
「丹沢山地における自然再生事業構想とシカ保護管理計画」羽山伸一(日本獣医畜産大学)
「総合討論」司会：松田裕之(横浜国立大学)

4. 地区例会として修士論文発表会を2005年3月5日横浜国立大学教育人間科学部に開催した。

- A-1 福井真（東大・広域システム）：代謝カップリングによる細胞内共生の進化：寄生か相利共生か？
- A-2 山口博史（東京薬科大・生命科学研究科）：著しく異なる系統が接触している北海道マイマイガ個体群の遺伝的構造
- A-3 土屋香織（都立大・動物生態学研究室）：カワトンボ類の雌の内部生殖器における精子の動態と精子競争
- A-4 中山智敦（東邦大・理学研究科生物学専攻）：人工基質上におけるタマキビ *Littorina brevicula* (Philippi) の生活史
- A-5 岸田宗範（東大・農学生命科学研究科）：若狭湾に來遊するマアジ稚魚の形態変異に関する研究
- A-6 内野透（東邦大・理学研究科生物学専攻）：東京湾江戸川放水路干潟におけるオキシジミ *Cyclina sinensis* の生活史
- A-7 中山新一朗（東大・理学部日光植物園）：植物の性配分多様性に関する数理解析及び検証
- A-8 中村亮二（東京都立大・植物生態学研究室）：競争と土壤養分の空間的不均質性が及ぼす植物個体の成長への影響
- A-9 中島剛（横浜国大・環境情報学府）：「落葉広葉樹林へのヒノキ植栽が土壌生態系に与える影響」
- A-10 島田豊（筑波大・環境科学研究科）：「スギ・ヒノキ人工林皆伐跡地における植生変化および土壤侵食が実生の定着に与える影響」
- A-11 河合美幸（宇都宮大・農学研究科）：クコ *Lycium chinense* Miller の NaCl に対する生育反応
- A-12 三田村理子（東邦大・理学部植物生態学研究室）：富士山森林限界における環境ストレスがシラビソ稚樹の生育に与える影響
- A-13 北條良敬（筑波大・生命環境科学研究科）：生育段階と光条件の違いによるコナラの樹冠形成パターン
- A-14 飛田礼子（東京都立大・植物生態学研究室）：ミズキ稚樹の当年枝における物質分配と葉の配置
- A-15 小清水ゆきの（茨城大・理工学研究科）：常緑広葉樹カクレミノの陽シュートと陰シュートにおける生態学的特性の比較
- A-16 大久保幸実（東京都立大・植物生態学研究室）：生育環境に対するシロイヌナズナ個体の反応が個体群のサイズ構造に及ぼす影響
- B-1 上野めぐ（横浜国立大・環境情報学府）：宮城県釜房地区の丘陵地小谷底に発達した湿地とリュウキンカの葉のフェノロジーについて
- B-2 鈴木智之（東京都立大・植物生態学研究室）：北八ヶ岳におけるモミ属が優占する森林の成長動態と構造
- B-3 高柳絵美子（筑波大・生命環境科学研究科）：本州中部地域における上部温帯林の更新様式とその植生地理学的位置付けに関する研究
- B-4 大橋春香（東京農工大・植生管理研究室）：東京都奥多摩地方におけるニホンジカの生息密度増加に

伴う植生の変化

- B-5 小林誠（立正大・地球環境科学研究科）：分布最北限ツバメの沢ブナ林の群落構造と動態に関する生態学的研究
- B-6 小林慶子（横浜国大・環境情報学府）：利用履歴が里山森林群集に与えた影響と群集の将来予測
- B-7 永野稔（茨城大・理工学研究科）：北関東放棄林のアズマネザサの群落構造と可塑性
- B-8 鈴木重雄（専修大・文学研究科）：千葉県大多喜町における竹林分布の拡大とその要因
- B-9 伊藤千恵（横浜国大・環境情報学府）：トウネズミモチとネズミモチの生態的相違と競合関係について
- B-10 小川政幸（筑波大・環境科学研究科）：八ヶ岳山麓の湿原における樹木動態と地上部純一次生産量の空間分布
- B-11 平塚雄三（横浜国大・環境情報学府）：砂防堰堤の様式の違いが山地溪畔植生の構造に及ぼす影響
- B-12 程云湘（筑波大・生命環境科学研究科）：ユーラシア大陸西部におけるステップ植生の植物社会的研究
- B-13 尹鐘学（東京農工大・植生管理研究室）：環東海（日本海）域の植生分布と組成に関する比較研究
- B-14 平田晶子（筑波大・環境科学研究科）：関東地方東部における人工林の種組成と地理的分布
- B-15 中尾勝洋（東京農工大・植生管理研究室）：九州地方における常緑広葉樹林の分布構造解析
- B-16 波多野玄（東京農工大・植生管理研究室）：関東南部太平洋型ブナ林における種組成と林床環境の季節変化の関係
5. 地区会報第54号の印刷と発送を行った。「シカと山と人の新しい関係—狩猟管理から生態系管理へ—」シンポジウム記録を掲載。
6. 次期事務局と役員（2006年1月～2007年12月）
地区会長：和田英太郎、庶務幹事：石井勲一郎、会計幹事：加藤知道
事務局：〒236-0001 神奈川県横浜市金沢区昭和町3173-25,
独立行政法人海洋研究開発機構 地球環境フロンティア研究センター (FRCGC),
<http://www.jamstec.go.jp/frcgc/jp/>

中部地区会

2006年度地区会大会

日時：平成18年6月10日（土）・11日（日）

場所：信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設

一般講演

「長野県松本市の水田におけるヘイケボタル (*Luciola lateralis*) の生活史」関口伸一・山本雅道（信州大・山地水環境教育研究センター）

「繁殖関数の違いと多種の周期的共存」岩田繁英（静岡大・院）

「絶滅危惧植物ハナノキ (*Acer pycnanthum* K. Koch) の繁殖生態」佐伯いく代（東京農工大・院・連合農

学研究科)

「ツメクサ属植物の標高による形態変化」尾鼻陽介 (信州大・理・生物)

「スギ人工林における伐採が土壌呼吸速度に与える影響」志津庸子 (岐阜大・院・農学研究科)

「遷移と水循環変化の関係の重要性」久米篤 (富山大・理・生物圏)

「インドネシア熱帯山地林における *Macaranga gigantea* の個葉形質の樹冠内変異」三神祐美 (信州大・院・工学系研究科)・高橋耕一 (信州大・理)

「ザゼンソウにおける個体サイズに依存した結実成功と発熱との関係」和田直也 (富山大・極東地域研究センター)

「三峰川下流部河川敷における外来植物オオキンケイギク *Coreopsis lanceolata* 侵入群落の特性」斎藤達也 (信州大・院・農学研究科)・大窪久美子 (信州大・農)

「小串鉾山跡地における植生の変遷とその要因」竹内啓太 (信州大・院・工学系研究科)・島野光司 (信州大・理)

「衛星画像 (ASTER) を用いた霧ヶ峰草原の植生変化の把握」尾関雅章・堀田昌伸 (長野県環境保全研究所)

「日本海型ブナ林構成種の太平洋側における生育状況から考えられること」蛭間啓 (飯田市美術館)

「教員養成系大学生の身近な自然観—信州大学教育学部生へのアンケート調査より—」青木舞 (信州大・教・附属幼稚園)・井田秀行 (信州大・教・志賀自然教育研)

日本生態学会中部地区会総会

エクスカッション (信大志賀自然教育園内の散策)

近畿地区会

前回報告以降、地区会活動なし。

中国四国地区会

第 50 回中国四国地区会 (2006 年 5 月 20, 21 日、於：愛媛大学)

1) 一般講演

「ショウドシマレンギョウ *Forsythia togashii* の異型花柱性」高島かな・末広喜代一 (香川大・教育・生物)

「岡山県中南部の杜叢林植生—特にシイノキ属の生態的特性と分布傾向—」位田真弓・波田善夫 (岡山理大院・総情・生地)

「オギ・ツルヨシの生態—岡山県旭川における地下部と土壌の関係—」藤谷佳代・中畑剛志・西川友浩・波田善夫 (岡山理大院・総情・生地)

「進化的時間における細菌の種間競争に及ぼす接合伝達による組換えの効果」竹田義明・保木本達也・中島敏幸 (愛媛大院・理工)

「接合伝達による染色体の遺伝的組換えが細菌の種間競争に及ぼす影響」三宅大介・中島敏幸 (愛媛大院・理工)

「徳島県勝浦川河口域の干潟における塩生湿地植物群落の潜在的ハビタット抽出」内八重智史・鎌田磨

人 (徳島大院・理工)

「外来樹種シマトネリコの生態学的特性と自然生態系への侵入の可能性」高橋裕志・石川慎吾・三宅尚 (高知大院・理)

「屋上緑化における竹炭利用が土壌間隙水の水質に及ぼす影響」岡田佳代子 (広島大・総科)・竹田一彦・中根周歩 (広島大院・生物圏)

「石手川源流域におけるアマゴの採餌様式および食性：河畔植生の異なる支流間での比較」坂本正吾・井上幹生 (愛媛大院・理工)

2) ポスター講演

「針葉樹人工林の伐採跡地における果実食鳥類群集に関与する要因」佐藤重穂・酒井敦 (森林総研・四国)

「宮島におけるニホンジカ (*Cervus nippon*) の行動と樹皮食い分布」佐合麻未 (広島大・総科)・金井塚務 (広島フィールドミュージアム)・中根周歩 (広島大院・生物圏)

「勝浦川河口干潟におけるカニ類の立地選好性抽出および潜在的生息域図の作成」赤松伸 (徳島大院・建設)・鎌田磨人 (徳島大・工・建設)

「外来種ヤナギバルイラソウの生態学的特性と自然生態系への逸出の可能性」宮本裕美子・石川慎吾・三宅尚 (高知大院・理・自然環境)

「岡山県南東部における植生と遷移一流紋岩地質において—」清久明則 (岡山理大・総情院・生地)・波田善夫 (岡山理大・総情・生地)

「高知県新荘川の河辺植生の動態—特にツルヨシ群落の異常繁茂について—」橋本恵・浅原暢貴・石川慎吾・三宅尚 (高知大院・理・自然環境)

「岡山北部における日射量と群落発達の関係」石川笑子 (岡山理大院・総情・生地)・波田善夫 (岡山理大・総情・生地)

「岡山県蒜山地域における土地利用の変遷」長谷川誠 (鳥取大・農・森林生態系管理学)・佐野淳之 (鳥取大・農・FSC)

「宮島におけるウバメガシ林について」濱中紀仁・豊原源太郎 (広島大・院理・宮島)

「里山のアカマツ枯死木に発生する変形菌の結実季節性」高橋和成 (岡山理大院・生地)・波田善夫 (岡山理大・総情)

「四国東北部におけるオオバコ (*Plantago asiatica* L.) の種子サイズと種子発芽特性の標高クライン」坂江美香・小林剛 (香川大・農)

「高齢スギ樹冠内における葉の窒素資源に対する球果生産様式」稲垣善之・奥田史郎・倉本恵生 (森林総研・四国)・中西麻美 (京大・フィールド研)

3) 総会

報告事項

地区会長選挙結果

総投票数：60、有効票数：59 (白票 1)

開票結果：中根周歩：14 票 (当選)、石川慎吾：10 票 (次点)

新幹事 (庶務、会計、県幹事) の選出

庶務幹事：中坪孝之、会計幹事：尹朝熙、県幹事：

佐野淳之（鳥取）、国井秀伸（島根）、安溪遊地（山口）、宮竹貴久（岡山）、金井塚務（広島）、鎌田磨人（徳島）、小林剛（香川）、石川慎吾（高知）、日鷹一雅（愛媛）

庶務報告

地区会員の状況 会員数 298 名(2006 年 5 月現在)

会計報告

中四国地区提出要望書（細見谷林道工事、上関原発）アフターケア委員会報告

各種委員会報告

その他

承認事項

2005 年度会計決算

2007 年度合同支部大会開催地（鳥取）

その他

審議事項

総会議長の選出

2006 年度会計予算

2008 年度合同支部大会開催地

地区会報の発行

アフターケア委員会活動

その他

九州地区会

(1) 地区委員会

日時：2005 年 5 月 14 日（土）

会場：琉球大学全学共通棟

検討項目

1) 合同大会・地区例会のための施設使用料の高騰に関する問題

2) 2008 年度生態学会全国大会開催

報告

自然保護に関する意見書

1. 「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設事業(仮称)に係わる環境影響評価図書案」

2. 「沖縄科学技術大学院大学(仮称)整備事業に係る環境影響評価準備書」

(2) 地区大会

第 50 回三学会九州支部・地区合同大会

会期：平成 17 年(2005 年)5 月 14 日(土)～15 日(日)

会場：琉球大学共通教育棟

一般講演（*は発表者）

「耕作地周辺に生息するイリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* の環境嗜好性と移動経路」* 田中幸子（琉大・理・海洋自然）、中西希（総合地球環境学研究所）、岡村麻生（西表野生生物保護センター）、伊澤雅子（琉大・理・海洋自然）

「テンの糞情報と餌植物の分布からみた行動域推定の試み」* 荒井秋晴（九歯大・中央研）、足立高行・桑原佳子（応用生態技術研究所）

「宮崎県えびの高原におけるオスジカの音声による分布調査」矢部恒晶（森林総研・九州）

「与論島に生息するクビワオオコウモリ *Pteropus*

dasyrnallus について」* 船越公威（鹿児島国際大・国際文化・生物）、大沢夕志（埼玉県自然学習センター）、大沢啓子（都立保谷高校）

「オオニワシダのあずまや構造と装飾品の特徴に関する研究」* 勝野陽子（九大・比文）、江口和洋（九大院・理・生物）、山口典之（立教大・理・生物）

「共同繁殖するカワスズメ科魚類 *Julidochromis transcriptus* のメスによる子の父性操作」牧野良美（大阪市大・理）、武山智博・渡辺勝敏（京大・理）、宗原弘幸（北大・水産）、幸田正典（大阪市大・理）、* 安房田智司（琉大・理工）

「ツマジロモンガラ配偶システム：メス防衛か資源防衛か？」* 関さと子（琉球大学）、高本剛祐（九州大学）、幸田正典（大阪市立大学）、狩野賢司（東京学芸大学）、中嶋康裕（日本大学）、桑村哲生（中京大学）

「有明海のタイラギが直面する 2 つの危機」逸見泰久（熊本大・沿岸域センター）

「瀬底島周辺での稚サンゴ定着／加入量の年次変動」野島哲（九州大学大学院理学府附属臨海実験所）

「造礁サンゴにおける強光・高水温ストレスと水流による緩和」* 中村崇・山崎秀雄（琉球大学・遺伝子実験センター）

「イスノキミタマバエ（ハエ目：タマバエ科）の生活史」* 上地奈美（沖縄農試）、湯川淳一（九大）

「“熱帯林”においてシロアリは“地上の枯死植物”を食べる重要な分解者か？」* 山田明徳（琉大・遺伝子実験センター）、井上徹志（JST・PRESTO／理研）

「西南諸島におけるツヤオオズアリの *Unicoloniality* に関する研究」* 大西一志（琉大・COMB）、菊地友則（琉大・農）、Julien Le Breton（琉大・農）、諏訪部真友子（琉大・農）、辻和希（琉大・農）

「ツヤオオハリアリにおけるカースト依存的巣仲間認識行動」* 菊地友則・大西一志・Julien Le Breton・辻和希（琉大・農）

「地表性アリのモザイク分布」* 諏訪部真友子・辻和希（琉大・農）

「琉球列島における移入アリ種の生態の解明に向け」* 辻和希（琉大・農）、丸山泉（富山大・理）、川端俊一（富山大・理）、中丸真由子（東工大・院・社会理工）、辻宣行（国立環境研）

公開シンポジウム「琉球列島の生物研究の新たな展開」

「はじめに」横田昌嗣（琉大・理・海洋自然）

「沖縄島沿岸域の微細藻類の多様性—ピラミナス属を例に一」須田彰一郎（琉大・理・海洋自然）

「北西太平洋の島嶼に分布するイソマツの系統生物地理学的研究—琉球列島を中心として—」松村俊一（琉球大院・理工・COE）

「琉球列島産陸生・陸水生カニ類の多様性に関する研究」成瀬貫（琉球大院・理工・COE、ウミガメ協・黒島研）

「ノグチゲラ *Sapheopipo noguchii* の採餌生態、系統関係、今後の研究の展開について」小高信彦（森林総研・九州）

「琉球列島の脊椎動物化石—特に陸生カメ類化石について—」高橋亮雄（琉球大院・理工・COE）

「総合討論」

司会：西平守孝（名古屋大・国際・観光産業）

ポスター講演

「留慶間島に生息するケラマジカが好んで食べる植物は？」大村華蓮・比嘉憲之朗・上原穂野香・上原由紀子（座間味村立慶留間小学校）・遠藤晃（佐賀大・農）
「サンゴ礁生物の粘液からできるミューカスフロックと堆積物—質が高い餌はどっち？」田村裕（沖縄県ミバエ対策事業所）、土屋誠（琉大・理・海洋自然）
「Reproductive cycle of rabbitfishes in Central Java, Indonesia」Lilik Harnadi（琉大・理工）、Endang Sri Susilo（ディボネゴロ大学・海洋）、竹村明洋（流大・熱生研）

「Surprising discovery of parasitic mites in introduced populations of the invasive ant *Pheidole megacephala* in Okinawa」Julien Le Breton（Laboratory of Sub-tropical Zoology, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus）

(3) 地区例会

第432回4月16日（土）熊本（熊本大学理学部）

「熊本県における希少生物保護対策について—汽水性貝類を中心として—」森敬介（九大院・理・天草臨海実験所）

第433回5月14日（土）沖縄（琉球大学全学共通棟）

* 四学会大会シンポジウムとして沖縄生物学会と合同開催

「ノグチゲラ *Sapheopipo noguchii* の採餌生態、系統関係、今後の研究の展開について」小高信彦（森林総研・九州）

第434回7月9日（土）鹿児島（鹿児島大学理学部）

* 生態学会からの発表はありませんでした

第435回11月5日（土）熊本（熊本大学理学部）

「シャクの巣穴はとても深い～アナジャコが作る巨大地下空間の秘密～」木下今日子（熊本県立大学環境共生学部）

第436回11月5日（土）宮崎（宮崎大学教育文化学部）

「南九州のキノコ」黒木秀一（宮崎県総合博物館）

第437回11月19日（土）佐賀（佐賀大学夢の実会館）

「ハンミョウ科昆虫の性比と産卵行動」桃下大・村里由美（長崎県立諫早高校）

「ベニツチカメムシに随伴する細菌食性線虫 *C. japonica* の生態」吉賀豊司（佐賀大・農）

第438回12月3日（土）福岡（福岡女子大学 A31 教室）

「自動撮影を用いたアナグマの糞場利用の解析」白枝直子・河野かつら（九州大学理学府生物科学専攻）

第439回12月10日（土）鹿児島（鹿児島大学理学部）（同時開催 生命化学特別セミナー）

共催 鹿児島大学理学部生命化学科生命機能講座

後援 鹿児島県高等学校教育研究会理科部会

高等学校における生物研究成果発表

「鹿児島県蘭牟田池周辺地域のアリ相」田代和馬・

鮫島旦・海老原研一・栗原孔士（原田豊）（池田高等学校）

「珪藻による甲突川の水質調査」深瀬拓朗・小長野淳（白須明）（鹿児島中央高等学校）

「メダカの流れ走性」深瀬拓朗・小長野淳（白須明）（鹿児島中央高等学校）

「タマネギのりん茎の顕微鏡観察」加納佳恵・今村桜子・福山佑那・結城晃・脇野由貴・向香織・山崎裕子・鳥原春佳・新川野々（山田島崇文）（鹿児島玉龍高等学校）

特別講演

「森林・土壌相互作用系の回復と熱帯林生態系の再生への取り組み」鈴木英治（鹿児島大学理学部）

第440回12月10日（土）長崎（長崎大学総合教育研究棟）

「長崎大学構内ビオトープの浮遊生物と水質環境」行平真也・品田裕輔・羽藤優太（長崎大・水産）、飯間雅文（長崎大・環境）

「ハマボウ（アオイ科）の地域的変異と個体群多様性」中西弘樹（長崎大・教育・生物）・中西こずえ（長崎大・環境）

「有明海・八代海沿岸の河口干潟におけるムツゴロウの分布と生息密度」竹垣毅・和田年史・兼森雄一（長崎大・院・生産）・夏莉豊（長崎大・水産）

「有明海におけるアサリ浮遊幼生の出現時期と水平分布」西濱士郎*・込本達也・前野幸男・木元克則（西海区水産研究所）・内藤剛（福岡県水産海洋技術センター有明海研究所）・森勇一郎・藤崎博（佐賀県有明水産振興センター）・藤井明彦（長崎県総合水産試験場）・那須博史・生嶋登（熊本県水産研究センター）

「有明海における環境変化と水産資源の動態について—問題点の整理」山口敦子（長崎大・水産）

「月周期と同調したカンモンハタの成熟・産卵」征矢野清・田中英洋・稲上裕也（長崎大・環東シナ海海洋環境資源）・宅島めぐみ（長崎県産業振興財団）・秋山信彦（東海大・海洋）・中村将（琉球大・熱帯生物圏）

第441回12月18日（日）大分（大分大学教育福祉科学部）

「ペトロジスト・トレーキングコースに参加して」吉田稔（日本生態学会会員）

(4) 地区会報 48、49 号発行（2005/7/31、12/31）

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 多摩川およびその流域の環境浄化に関する研究

①

・産業活動または住生活と多摩川およびその流域との

関係に関する調査・研究

- ・排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査・研究
- ・多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・研究
- ・多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・研究

② 1 年間最高限度額 200 万円

③ 平成 19 年 1 月 15 日 (月)

④ 財団法人とうきゅう環境浄化財団

〒 150-0002

東京都渋谷区渋谷 1 丁目 16 番 14 号 (渋谷地下鉄ビル内)

電話：03-3400-9142 ファックス：03-3400-9141

2. 第 18 回国際生気象学会議 (ICB2008) 開催案内

日時：2008 年 9 月 22 日 (月) ～ 26 日 (金)

会場：タワーホール船堀 (東京都江戸川区)

テーマ：自然の中のハーモニー (Harmony within Nature)

主催：国際生気象学会 (ISB)

共催：世界気象機関 (WMO)、日本生気象学会 (JSB)

会長：入来正躬 (山梨大学名誉教授)

ホームページ：<http://www.icb2008.com/>

問合先：第 18 回国際生気象学会議事務局

〒 170-0002 東京都豊島区巣鴨 1-24-12

(有) アイベック内 (担当：菊池)

TEL：03-5978-3576 FAX：03-5978-4068

Email：icb2008@ipecc-pub.co.jp

3. 第 27 回 (2007 年) 関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ

恒例の生態学関係修士論文発表会が下記の通り東京大学において開催されます。この発表会は、本年度修士課程を修了される大学院生に、その研究成果を発表する機会を提供するものです。この発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に拘らず発表できます。是非ご参加ください。また多くの方々の御来聴もお待ちしております。

主催：生態学会関東地区会

日時：平成 19 年 3 月 3 日 (土)

会場：東京大学弥生キャンパス 農学部 1 号館および 2 号館

(地下鉄南北線・東大前駅より徒歩 1 分)

地下鉄千代田線・根津駅より徒歩 8 分

地下鉄丸の内線・本郷三丁目駅より徒歩 15 分)

URL：<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/campus/il-map.html>

問い合わせ先：東京大学大学院 農学生命科学研究科 森林植物学研究室 気付 2007 年関東地区生態学関係修士論文発表会事務局

住所：〒 113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

TEL：03-5841-5206 FAX：03-5841-7554

e-mail：kantou_master@yahoo.co.jp

書 評

地球化学講座 5 南川雅男・吉岡崇仁 共編 「生物地球化学」 pp256 培風館、本体価格 3675 円 ISBN4-563-04905-0

生態学会学会員のなかで、自分の専門分野を「生物地球化学 (Biogeochemistry)」と考えている人は少数派であろう。しかし、生態系を考える際に、いわゆる物質循環は、生態系の基礎基盤であると考えられる。その基盤についてより良く理解しておく事は、その上に成立している生態系のより深い理解に通じるはずである。

生態系における物質循環を研究する上で、最近良く用いられるようになってきたものが、安定同位体を用いた手法である。特に食物網解析では様々な研究が国内でも行われてきている。しかし、安定同位体比の解釈には、同位体分別についての深い知識と理解がしばしば必要であるにも関わらず、生態学における安定同位体の利用については、邦文の良いテキストが存在しなかった。「安定同位体地球化学」(酒井均、松久幸敬著、ISBN：4-13-060713-8、1996 年)は非常に良いテキストであるが、同位体の取り扱いにおいて地球化学と生態学では、「平衡」をメインに扱うか(地球化学)、「動的」なものを扱うことが多いか(生態学の多くの場合)という違いがある。そのため、少なくとも書評子には十分に読みこなすのが難しいというのが正直なところであった。

本書では、本文中にもあるとおり、「生物地球化学的知見の中でもとくに重要と考えられる、生態系における親生元素の分配法則と安定同位体の変動について」非常に詳細な解説がなされている。全体として、陸上、湖沼、海洋というような限られた生態系についての記述ではなく、様々な生態系において、生元素という、いわば共通貨幣が、どのように利用されて、異なる経済システム(つまり物質循環システム)が成立しているのか、その概略をつかむ事が出来るのが特徴である。

この、様々な生態系をつらなく生元素循環という点は、是非とも強調しておきたい点である。生元素の循環というものはどのような生態系においても共通の、いわば生命体の代謝と考える事が出来る。そのため、様々な生態系でどのような代謝の特徴があるかを勉強しておく事で、自分の研究対象を、より客観的に、より高い視点から捉える事が出来る。学生の頃に指導教官に指摘されたことだが、特に海洋・湖沼の物質循環研究は、陸上生態系のそれと比較して、非常に進んでいる。系の取り扱い、前提条件の吟味のレベル、シビヤな分析化学としての側面など、様々な点で、やはり土壤を主に扱ってきた書評子としては勉強になる部分が多分にある。是非、自分の研究対象以外の生態系では、どのような物質循環像が描かれているのか、という考えを持ちながら通読することをおすすめしたい。

親生元素の分配法則としては、Ecological Stoichiometry が現在すばらしい成果を上げているが、本書では、より存在度の低い元素の挙動までふくめた議論がなされてい

る。様々な生物体をとる元素濃度についてまとまった情報がこれまであまりなく、本書でまとめられているデータは非常に有用である。

安定同位体については、豊富な経験をもつ著者達が、様々な側面について説明しており、非常に読み応えがある。安定同位体を用いることのある方には、是非一読をおすすめする内容である。というのも、同位体分別の取り扱い、実際のデータの解釈について、丁寧な解説がなされているからである。そして、微生物の代謝から古環境の復元まで、ミクロからマクロ、代謝のレベルから地球史レベルまで、様々な時空間スケールでの同位体比の活用例を俯瞰できる。

敢えて難点を挙げるとすれば、地球化学という側面がやはり強いために、生態学的な色の濃い研究例について、取り上げられている数が少ないと感じた。たとえば、生態系の食物連鎖長の決定要因を鮮やかに示した D.M. Post らの論文 (Nature, 2000 年) についての言及がないことが挙げられよう。また、これは、発展している研究分野においては仕方のない事であるが、「同化過程における窒素同位体分別」については、微量硝酸窒素酸素同位体比の測定が可能になった事もあり、本書での議論から、2006 年夏現在では、さらに 1 - 2 段階進んだ議論が展開されていると書評子は考える。しかし、この 2 点は些末にすぎず、本書の非常に広範囲に渡る、念入りに選択された引用文献を足がかりとして、過去の論文およびそれらを引用している最新の文献に当たることをおすすめする。同位体研究の広がりから、生元素循環研究の広

がりとその可能性を感じる事が出来ると思う。

また、先日発売された “Stable Isotope Ecology” (B. Fry 著、ISBN : 0387305130、2006 年) を本書の後に読み進めると良い。丁寧に同位体分別、特に異なる同位体比を持った物質の混合をどう考えるかについての知識を深める事が出来るであろう。

本書は、学部生 - 修士の学生の皆さんには、とにかく何度も何度も目を通して、少しでも興味があるトピックについては研究分野を超えて、とにかく文献に当たってみる、博士課程の学生の皆さんには、ざっと理解した上で、批判的な読み方、そしてポストドクから書評子のような教員の皆さんには、それぞれの章で感じられる筆者達の考え方を感じながら読むというつきあい方を提案したい、つまり、様々なレベルに答えてくれる好書であると書評子は考える。是非手元に置き、様々な読み方をして頂きたい一冊である。

(東京工業大学大学院総合理工学研究科・木庭啓介)

訂 正

ニュースレター No.10 日本生態学会役員一覧に記載漏れがありましたので追加致します。

大会企画委員会

山内 淳

2005.1 ~ 2007.12

日本生態学会 会則

(2006 年 3 月改正)

第 1 章 総 則

第 1 条 「名称」 本会は日本生態学会 (The Ecological Society of Japan) という。

第 2 条 「目的」 本会は生態学の進歩と普及をはかることを目的とする。

第 3 条 「事業」 本会はその目的を達成するために、つぎの事業を行なう。

- i) 講演会, 研究発表会, 研究旅行など.
- ii) 内外の生態学に関係ある諸学会, 諸機関との連絡.
- iii) 会誌および図書などの刊行配布.
- iv) そのほか本会の目的を達成するに必要な事項.

第 2 章 会 員

第 4 条 「会員」 本会の会員は正会員 (一般, 学生) (A, B, C), 団体会員 (A, B, C), 賛助会員, 名誉会員とする。

- i) 正会員は本会の趣旨に賛成し, 所定の入会手続きを経て, 所定の会費を納める個人.
- ii) 団体会員は本会の趣旨に賛成し, 所定の入会手続きを経て, 所定の会費を納める.
- iii) 賛助会員は本会の趣旨に賛成し, 別に定める賛助会員会費を納める個人または団体.
- iv) 名誉会員は日本の生態学および本会の発展に大きな功績のあった個人のうちから, 全国委員会の推薦により, 総会において決定される.

第 5 条 「入会」 本会に入会を希望するものは, 会長あて, 住所, 職業 (所属機関) を記入した入会申込書に, 申込当年度分以上の会費をそえて提出しなければならない。

第 6 条 「退会」 退会しようとするものは, 会長あて, 退会届を提出しなければならない。ただし, すでに納めた会費は払いもどさない。

第 7 条 「権利」 会員はつぎの権利をもつ。

- i) 会誌 (Ecological Research, 日本生態学会誌, 保全生態学研究) および印刷物 (名簿, 大会プログラムなど) の配布をうけること。ただし会誌については, A 会員は Ecological Research と日本生態学会誌, C 会員は保全生態学研究のみの配布を受ける。
- ii) 会誌に投稿すること (正会員, 名誉会員に限る)。ただし, C 会員は日本生態学会誌への投稿はできない。
- iii) 本会の会合に出席し, 研究発表・講演を行い, 意見をのべること (正会員, 名誉会員に限る)。ただし, C 会員は生態学会大会での発表はできない。
- iv) 本会の事業・運営に関し, 全国委員会に対しまたは総会において意見をのべること。
- v) 本会の会長・全国委員を選任し, またはこれらに選任されること。ただしこの権利は正会員に限る。

第 8 条 「義務」 会員はつぎの義務を負う。本会の会則を守ること。(会の運営を妨げ, あるいは会の名誉を著しく毀損したと認められる場合は, 全国委員会の決議により退会させ, または除名することがある)

第 3 章 事務局, 編集部および地区会

第 9 条 「事務局, 編集部」 全国委員会は事務局および編集部の所在地をきめる。

第 10 条 「地区会」 全国を北海道, 東北, 関東, 中部, 近畿, 中国・四国, および九州の 7 地区にわけ, 各地区に地区会をもうける。国内在住の会員は各居住地の地区会に属する。

第 4 章 役 員

第 11 条 本会につぎの役員をおく。

- i) 会長 1 名 ii) 全国委員 若干名 iii) 幹事長 1 名
- iv) 幹事 (庶務, 会計, 編集) 若干名 v) 常任委員 若干名
- vi) 会計監事 2 名 vii) 編集委員長 3 名 viii) 編集委員 若干名
- ix) 各種専門委員 若干名

第 12 条 会長は本会を代表し, 会務を統べる。会長は正会員の互選 (単記無記名) によって定める。この場合, 全国委員会は会長候補者を 5 名推薦することができる。会長の任期は 2 年とし, 1 月から始まるものとする。再選をさまたげる。

第 13 条 全国委員は、全国から正会員の互選によって選ばれた 15 名、および各地区から正会員の互選によって選ばれた各 1 名とする。その任期は 2 年とし、1 月から始まるものとする。連続三選をさまたげる。会長および幹事長は全国委員をかねることができない。

第 14 条 会長選出は就任の 1 年前までに行う。

i) 全国委員改選は前年度内に行う。

ii) 会長および全国委員の選出に関するその他の事項は別に定める。

第 15 条 幹事長、幹事、会計監事、および編集委員長は全国委員会の協議により、正会員の中から選び、会長が委嘱する。任期は 3 年とし重任してもよい。編集幹事は編集委員長をかねることができる。常任委員は会長の指名にもとづき、全国委員会の議を経て選出する。任期は 2 年とし重任してもよい。

第 16 条 編集委員には Ecological Research 担当者、日本生態学会誌担当者および保全生態学研究担当者をおく。各編集委員は十数名とし前任編集委員会の協議により正会員から選び、全国委員会の承認を経て、会長がこれを委嘱する。任期は 3 年とし、重任してもよい。編集幹事は編集委員をかねる。

第 17 条 各種専門委員は全国委員会の協議により必要に応じて正会員中から選ぶ。検討委員は主に正会員の中から選ぶ、必要に応じては非会員から選ぶ。会長がこれを委嘱する。任期、人数はその都度決定する。

第 5 章 機 関

第 18 条 「総会」 総会は会の最高議決機関であり、会務、会計そのほか重要事項を議決する。会長は毎年 1 回これを召集しなければならない。ただし全国委員会が必要と認め、また正会員の 3 分の 1 以上から請求があった時には会長は臨時に召集しなければならない。

第 19 条 「全国委員会」 全国委員会は会長および全国委員で構成し、会長が議長となる。全国委員会では会の運営方針を審議する。ただし緊急事項は総会に代って決定することができるが、次回総会において承認を得なければならない。全国委員会は会長がこれを召集する。ただし全国委員の 3 分の 1 以上の申出があった時には開催しなければならない。

第 20 条 「常任委員会」 常任委員会は会長、次期会長、常任委員および幹事長、学術会議会員、庶務幹事、会計幹事、編集委員長などで構成し、本会の運営に関する緊急要務について審議する。その審議結果のうち、執行事項については全国委員会の承認または追認を求めるものとする。

第 21 条 「編集委員会」 編集委員会には、Ecological Research 編集委員会、日本生態学会誌編集委員会および保全生態学研究編集委員会をおく。各委員会は編集委員長、編集幹事および編集委員で構成し、編集委員長がこれを召集して議長となる。編集委員会では、会誌の編集業務を行なう。人数は必要に応じて決めることができる。それぞれの編集委員会の少なくとも半数は正会員から選出する。

第 22 条 「各種専門委員会」 各種専門委員会は、委員長ならびに委員で構成し、委員長がこれを召集して、議長となる。審議結果のうち執行事項については、全国委員会の承認または追認を受けるものとする。

第 23 条 「事務局」 事務局は幹事長および幹事をもって構成し、会長を助けて会務を運営する。

第 24 条 「学会誌刊行協議会」 それぞれの学会誌の刊行業務（刊行方針・形態）や会誌会計関連事項等を協議する学会誌刊行協議会を置く。委員は、各学会誌の編集委員長、編集幹事、前編集委員長、次期編集事務局予定者 1～2 名、庶務幹事、編集委員長が推薦する編集委員によって構成される。協議会の委員長はその編集委員長が兼ね、委員長が推薦した委員については、全国委員会の承認を受ける。任期は編集委員長と同じとする。

第 6 章 会 計

第 25 条 本会の経費は会費そのほかの収入をもってあてる。

第 26 条 本会の会計年度は毎年 1 月 1 日に始まり、12 月末日に終る。

第 27 条 会長は事業年度間の収支決算をつぎの総会に報告してその承認を受けなければならない。

第 28 条 本会に対する寄付または補助金などは全国委員会の議を経て会長がこれを受けることができる。

第 7 章 表 彰

第 29 条 すぐれた研究業績を持ち、生態学の発展に大きな貢献をしている本学会の中堅または若手会員に対して、その研究業績を表彰することによりわが国の生態学の一層の活性化をはかるため学会奨励賞（日本生態学会宮地賞）を設ける。顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした者に学会賞（日本生態学会賞）を贈る。本学会の運営・活動又は生態学の普及・発展に目覚しい貢献をした者に学会功労賞（日本生態学会功労賞）を贈る Ecological Research の各巻に掲載された論文の中から、特に優れた論文



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 大串隆之

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

共同利用委員会からのお知らせ

2007 年度（平成 19 年度）京都大学生態学研究センター 共同利用事業公募要項

京都大学生態学研究センターでは、2007 年度の共同利用事業の一部として以下の内容のものを公募します。

1. 公募事項

(1) 研究会：生態学およびその関連分野での重要な研究課題について、研究結果のまとめ・現状分析・将来の研究計画の作成などを行い、当センターの共同研究の推進に役立つ研究会の企画を募集します。

(2) 集中講義 & セミナーおよび野外実習：学部学生・大学院生を受講対象とし、全国に公開されるもので、生態学およびその関連分野において重要だが教育の場に限られる課題についての集中講義 & セミナーおよび野外実習の企画を募集します。

2. 開催期日

2007 年 5 月 1 日から 2008 年 2 月 29 日までの期間に開かれるものとします。

3. 採択件数

研究会および集中講義 & セミナー・野外実習、合わせて 5 件程度の採択を予定しています。

4. 応募資格

大学その他の研究機関に所属する研究者、またはこれと

同等の研究能力を有すると認められる方とします。なお、企画には本センターの教員の参加があることが条件となります。

5. 申請方法

研究会、集中講義 & セミナーおよび野外実習のそれぞれについて、下記の必要事項を記載した企画書を作成し、郵送、ファックスまたは、e-mail にて直接当センターに提出してください。

必要記載事項：

- (1) 申込者氏名・所属先および職・所属先住所・電話・ファックス・e-mail
- (2) 研究会、集中講義 & セミナー、野外実習の別
- (3) 課題名
- (4) 開催予定日時
- (5) 開催予定場所
- (6) 開催目的および内容の概略（400 字程度）
- (7) 参加予定者の一覧（氏名・所属）

なお、申請が採択された場合、所属機関（部局）の長を通して、正式の研究会等申請書を改めて提出していただきます。

6. 申込期限：2007 年 4 月 6 日（金）必着。

7. 企画書送付先

〒520-2113 大津市平野2丁目509-3

京都大学生態学研究センター 共同利用担当

TEL : (077) 549-8200(代表)

FAX : (077) 549-8201

e-mail : kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp

郵送の場合は、封筒の表に「共同利用事業企画書在中」と朱書きして下さい。

8. 選考

当センターにおいて2007年4月中旬に行います。

9. 所要経費

研究会の出席者、集中講義 & セミナーの講師の旅費、場合によってはその他必要経費の全部または一部を、当センターにおいて支出します。1件について20万円以

内を予定しています。

10. 報告書および論文の提出

(1) 共同利用事業終了後、1ヶ月以内に報告書を当センターに提出して下さい。なお、提出された報告書は、その全部または一部を当センターの業績目録に掲載します。

(2) 共同利用事業によって得られた成果を論文等により発表する場合には、京都大学生態学研究センター共同利用事業の援助を受けた旨を論文等に記していただくようお願いいたします。また、別刷り1部を当センター共同利用係宛に提出してください。

この公募内容につきまして、不明な点がございましたら、当センター共同利用担当に御照会下さい。

センター員の異動

- ・2005年度日本学術振興会外国人特別研究員のYanhui Yan氏が9月13日で採用期間を終え、COE 研究員として着任されました。
- ・総合地球環境学研究所の川端善一郎教授、湯本貴和教授、谷内茂雄助教授が、7月1日付けでセンターの客員教官になりました。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌 *	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については2007年度より冊子を必要としない会員への割引（ER 900 円、生態誌 600 円）を開始いたします。すでに会員の方が今後申請される場合は2008年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200 円 東北地区：800 円 関東地区：600 円 中部地区：0 円

近畿地区：400 円 中国・四国地区：400 円 九州地区：700 円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp